

天然ブリ仔資源保護培養のための 基礎調査実験（抄録）

村山達朗・北沢博夫

日本栽培漁業協会から委託された天然ブリ仔資源保護培養のための基礎調査実験の一環として、本実験の基礎となるモジャコ及びブリ幼魚の分布生態を究明するため下記の調査を実施した。

1. 標識放流調査
2. ブリ稚仔の分布実態調査
3. 漁獲統計調査
4. 香住港の漁獲統計からみたブリ資源の解析
5. 魚体測定調査

詳しくは「日本栽培漁業協会研究資料№32、1986」に報告されているので、ここでは結果の概要について述べる。

結 果 の 概 要

1) 標識放流調査

本年度は10月に、ブリ当才魚526尾を日御碕周辺で2次にわたり放流して調査を行った。1986年6月1日までの再捕率は1.9%である。再捕率が極めて低く、田中の方法で求めた資源特性値もあまり信頼性はないが、過去の結果と比較すると、1984年の9月のものに近かった。これは、0才魚の動態のうち滞留期に概当するものであり、1985年は前年に比べ南下時期がやや遅かったと推定される。

2) ブリ稚仔の分布実態調査

日本海南海域におけるブリ稚仔の分布および加入状況を明らかにするため、調査船による試験操業とモジャコ採捕船の標本船調査を実施した。試験操業の結果からは、1983年と同じように漁期は遅れるが1984年のような不漁はないと予想されたが、業者による採捕結果は、採捕達成率で33%と過去4年間の最低であった。この原因については、モジャコの日本海への加入量自体が少なかったことに加え、海況変化に伴ってモジャコの主群が日本海西部の沖合を通過したことが考えられる。

3) 漁獲統計調査

島根・兵庫・富山県の漁獲統計資料を用いた。島根県では1985年の前半、1才魚（1984年級）が多獲されたが、これは北部日本海での越冬がみられなかったことから、日本海西部に分布が偏った

ためであろう。1985年級については、モジャコ漁況および各地の漁況からみて、日本海に加入した0才魚が山陰の沖合を通過し、直接若狭、能登海域へ加入し、また、富山県の1986年1～2月の漁獲量が平年を大きく上回っており、日本海北部でかなりの量が越冬したと考えられる。

4) 香住港の漁獲統計からみたブリ資源の解析

兵庫県香住港の漁獲統計を用いて、近年日本海での漁獲の中心となっている未成魚（0～2才魚）の全減少係数 Z と漁獲死亡係数 F の推定を試みた。この結果、 $Z=2.78$ という値が得られ、これに、加藤(1985)が求めた $M=1.05$ から $F=1.73$ が得られた。ブリ資源の F は年々増加傾向にあるが、今回の結果もそれを裏付けるものであった。

5) 魚体測定調査

浜田港における銘柄別体長測定と銘柄別漁獲統計資料を用い漁獲物の体長組成を推定した。この結果、同一年級群の中にも産卵期及び産卵場所の違いによると思われる3つの群れが存在することがわかった。